

## コメ増産の政策転換で注目される新たな農法とは

### ◆コメ増産への政策転換で注目される大規模農地向け「乾田直播」栽培

2025年8月、政府は米の安定供給に関する第3回閣僚会議でコメ価格高騰の原因を需要見通しの誤りと、高温によるコメの歩留まり低下と分析し、コメ増産へと舵を切った。コメ増産は簡単なことではないが、近年、離農した農家の農地を受け継ぐ形で農地の集約・大規模化が進み、少ない人手で効率的に栽培できる「乾田直播」（かんでんちょくは）が注目されている。

育苗や田植えなどの工程を省略し、種もみを乾いた畑に直接播いて、一定期間後に湛水する栽培方法で、手間やコストの削減に加え、節水効果も期待できる。発芽不良や雑草抑制といった課題もあるが、種もみの発育を促進するバイオスティミュラント資材の導入やGPSやドローンなどICT技術を活用した精密な雑草管理・施肥などの技術の進展で改善が進んでいる。農林水産省によると耕作面積は23年までの10年間で、北海道や東北地域を中心に約2.3倍に拡大している。

### ◆「節水型乾田直播」はさらに高い節水効果と環境負荷の低減を目指す

乾田直播の進化版である「節水型乾田直播」は、発芽後の湛水も不要で、水は散水のみとなるため水資源と管理作業を大幅に削減できる。さらに水を張らないことで、田んぼからのメタン発生を抑制し、温室効果ガス排出量の削減にも貢献する。全国で事業化に向けた技術確立と実証実験が進行している。

25年7月、BASFジャパン、農業スタートアップのNEWGREEN、大手米卸のヤマタネは、節水型乾田直播栽培を活用した脱炭素・低環境負荷米の生産・流通および付加価値創出に向け、戦略的提携の協議を開始した。3社はBASFの栽培管理支援システム「xarvio（ザルビオ）」を導入し、農家の生産効率向上と収量安定を図るとともに、収穫した低炭素米を高付加価値米として流通させる仕組みを構築する。さらに、生産から流通までの過程で削減されたCO<sub>2</sub>排出量を炭素クレジットとして販売し、農家の収益拡大につなげることを目指す。

気候変動や世界的な食糧・政治不安のリスクが高まるなか、コメの自給体制強化とともに脱炭素化に向けたコメ作りの技術革新に期待がかかる。【新井佳美】